

3 March

- 6 [土]—7 [日] 市民と創造する演劇『甘い丘』  
◎PLAT アートスペース
- 10 [水] 佐藤こうじ 音響プランニング講座  
「俳優のこころの動きをとらえて創造する音響演出」  
◎PLAT 主ホール
- 12 [金]—15 [日] ええじゃないか豊橋映画祭2021  
◎PLAT 主ホール
- 13 [土]—14 [日] PLAT小劇場シリーズ  
木ノ下歌舞伎『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』  
◎PLAT アートスペース
- 20 [土・祝]—21 [日]  
志多ら全国ツアー「いのちの力」豊橋公演  
◎PLAT 主ホール
- 22 [月]—23 [火] 豊橋演劇鑑賞会 第283回例会  
加藤健一事務所『ドレッサー』◎PLAT 主ホール
- 22 [月] プラットワンコインコンサート2020  
白井那奈 & 高柳満理奈  
「ピアノのヴィルトゥオーゾ～名曲に乗せて～」  
◎PLAT アートスペース
- 25 [木] 第26回 開拓塾卒業ライブ◎PLAT 主ホール
- 26 [金] 豊橋中央高校吹奏楽部  
第23回 定期演奏会◎PLAT 主ホール
- 27 [土] ハワイアンバンド  
「アロハタイム」10周年記念ライブ  
◎PLAT アートスペース
- 29 [月] プラットワンコインコンサート2020  
Lis「ドイツの風に乗せて」  
◎PLAT アートスペース

4 April

- 2 [金]—5 [月] 日本生花司松月堂古流東三支部  
春のいけばな展  
◎PLAT アートスペース
- 4 [日] 豊橋おやこ劇場協議会  
第459回 高学年例会  
時代横町『地獄八景だきや』  
◎PLAT 主ホール
- 9 [金] 高森有紀コンサートVol.14  
～愛につつまれて～  
◎PLAT 主ホール
- 22 [木] 大学・短期大学・専門学校 進学ガイダンス  
◎PLAT アートスペース
- 24 [土] 春風亭小朝 独演会 ◎PLAT 主ホール
- 27 [火]・30 [金]—5/1 [土]  
豊橋演劇鑑賞会 第278回例会  
トム・プロジェクト『Sing a Song』  
◎PLAT 主ホール



PLAT NEWS

公益財団法人  
豊橋文化振興財団情報誌  
2021年3月—4月

vol. 48



TOYOHASHI  
ARTS  
THEATRE  
PLAT



TOYOHASHI ARTS THEATRE  
PLAT

CONTENTS

- 表紙  
『甘い丘』桑原裕子 2
- INTERVIEW:1  
市民と創造する演劇  
『甘い丘』  
自分を見つけ出した時に、  
勇気が湧いてくる。  
桑原裕子 6
- INTERVIEW:2  
木ノ下歌舞伎  
『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』  
歌舞伎は現代につながっている。  
木ノ下裕一  
時間を超え歌舞伎はやはり面白い。  
多田淳之介 10
- INTERVIEW:3  
チャルフィッチェの〈映像演劇〉  
『風景、世界、アクセント、  
すべてこの部屋の外側の出来事』  
「演劇」として発生するフィクションと  
「映像」として発生するフィクションという  
二つの領域を同時に経験する。  
作・演出 岡田利規 映像 山田晋平 12
- INFORMATION  
PLAT主催公演情報 14
- FOYER  
高校生と創る演劇  
『Yに浮かぶ』  
令和2年に、面白い生き物と出会って  
藤原佳奈 15
- SUPPORT  
TICKET CENTER
- 裏表紙  
『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』  
木ノ下裕一  
PLAT CALENDAR





## 「市民と創造する演劇」とオーディション

矢作——今回桑原さんに「市民と創造する演劇」とお話ししましたが、最初どのように思われましたか。

桑原——プラットの矢作さんから「プラットの芸術文化アドバイザーになりませんか」とお話をいただいた時、矢作さんに私が主宰をつとめる劇団・KAKUTAは集団力がある、と言っていただきました。KAKUTAの劇団員と20年間、一緒に一つのチームを作っていく喜びやおもしろさ、そして互いに共通言語を持って生まれる作品の強さも実感していたので、プラットのアドバイザーに誘われていただくにあたり、ただ意見を言わせていただくだけでなく、この劇場ごと市民の人たちと仲間となり一緒に作っていくことで深く向き合えるのであれば、やる意味があると思いました。アドバイザー就任後に「市民と創造する演劇」のお話をいただいた時、まず最初にそのことを思い出しました。そして、上演作品として私が10年程前に発表した『甘い丘』はどうかとお話いただきました。『甘い丘』はそもそも登場人物も少ないので、グッと絞った人数でやってみてはどうかと言ってください、「ギュッとしたものと一緒に作れる」と、もともとやってみたかったことに臨めるのだなと、それが楽しみでした。

矢作——過去に地元の人たちと作品作りをした経験から発想することはありますか。

桑原——ずっと東京で演劇をやっていたので、「東京が一番」みたいな幻想を悪気もなく抱いていました。だけど、北九州芸術劇場でオーディションで選ばれた出演者と創作する演劇を上演した時に、完全になめていたなと反省しました。その土地土地に行ったら、力のある人たちはたくさん居て、しかも擦れてない、そういう素材の良さみたいな強みもある。劇団のオーディションな

どでは私のことを知ってオーディションを受けてきてくれたという人が多いけれど、私のことをよく知らない人も大勢おられましたし、そういう人たちと作れるのが良かった。お互いを知り合っていくことを丁寧にできる期間でした。東京で活動していると、どうやったら売れるかとか、目立てるかにどうしても意識が行ってしまいますが、そこを超えた演劇を創作するという純粋な喜びが楽しみです。やる気がしています。

矢作——実際にオーディションをされてみて、いかがでしたか。

桑原——いい人材がたくさんおられて、次にできる機会があるのでしたらオリジナルで作ってみたいと思うような人たちにいっぱい会えました。40代から50代の女性だけ集めた追加オーディションをしたのですが、私は当て書きをするタイプなので、この人たちの話も書いてみたいと、また発見と野望が生まれました。

矢作——ワークショップ初日の手ごたえはいかがでしたか。

桑原——終わってからホテルに戻って、すごい体力使わせちゃったと反省しました。私自身も初日ヘットヘットでした。皆さん前のめりで来てくれたからうれしくて、じゃあこれも、あれもと、結構キツイことをさせてしまいました。なぜかという、この『甘い丘』の出演者募集要項を出す時に「本気で大変な思いをして演劇を作ることを一緒にやりませんか。汗みどろで、みんなで必死に作ることをやりたい」と宣言していたから、その意気込みを最初に皆さんに見せようと思ったところもあります。皆さんそれに答えようとして、お互いヘットヘットに。だから、これはいけるなという気持ちになりました。これをみんなで高めてキープしていけたら、作品作りはすごくおもしろいなという気がしています。今後は単純に体力だけ消耗しないように工夫をしなければと思っています。

# 自分を見つけ出した時に、勇気が湧いてくる。桑原裕子

作・演出

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

## INTERVIEW:1

### ターニングポイントとなった『甘い丘』

矢作——『甘い丘』はどのような作品で、今回どう上演なさるのでしょうか。

桑原——初演の2007年当時は、劇団員も同世代が多かったので青春群像劇を創ることが多く、「等身大の肌感覚」という触れ込みで、自分の青臭さをそのまま出すような劇作スタイルだったのですが、29歳から30歳に渡る時に、矢作さんがシアタートラム(世田谷パブリックシアター小劇場)に呼んでくださいました。シアタートラムはその当時のKAKUTAの活動規模からすると、1個ステージが上がった感じでした。そこで何をやろうかと



考えた時に、仮に5年先に再演しても色褪せない、私が35歳になってもやれる、上質な娯楽作品を作ろう。同世代だけが一緒に楽しめる作品ではなく、自分よりもずっとお姉さんだったり、あるいはもっと下の人だったりも楽しめる作品を創れないかと考えたのが、この『甘い丘』です。だから、意識的に背伸びするぐらいのつもりで書きました。最初は本当に書けるのかなと思ったほど、苦勞した作品です。

矢作——『甘い丘』という作品で、KAKUTAと桑原さんには変化が現れたと思います。初演時には「岸田國士戯曲賞」にエントリーされ、再演では文化庁芸術祭新人賞を受賞されました。登場人物も年齢の幅も広く、いろんな人に参加してもらえる可能性がある作品ですね。

桑原——そうですね。私、『甘い丘』からそうやって少し自分より年上や、大人の作品を幅広く書こうと意識するようになって、年下側からの視線という見方をだんだんやめるようになりました。女は女で、ずっと、何歳になってもわかり合う部分があるし、男は男で、いくつになっても女からすればわかり合えない部分がある。でも、ずっと50歳になっても少年だなんて思ったり、逆に、18歳でも大人だなんて思ったりすることがある。年齢の区分けでみる感覚がなくなって、できたのがプラットプロデュース『荒れ野』でした。だから、『荒れ野』を書いた時に、お客さんから「あなたのお母さんぐらいの世代の人の気持ちがよくわかるね」というようなことを仰っていただいたのですが、40代の気持ちと60代の気持ちは、そこまで変わらないと思ったのは、『甘い丘』をやったから。『甘い丘』には20代から50代までの人たちが出てきますが、通じる部分はあるし、どれだけ年が近くてもわかり合えない部分もある。そういうところは、幅広くできる作品だと思っています。

3月6日[土]13:00開演／17:30開演

3月7日[日]13:00開演

作・演出＝桑原裕子

出演＝オーディションで選ばれた一般市民／置田浩紳、織詠、酒井晴江

会場＝PLATアートスペース

市民と創造する演劇

# 『甘い丘』

桑原裕子〔くわばら・ゆうこ〕  
／劇団KAKUTA主宰。劇作家・演出家・俳優。プロドウェイミュージカル「ピーターパン」の潤色・演出や、脚本家として手掛けた世田谷パブリックシアター主催「往転」(作・演出)が岸田國士戯曲賞、鶴屋南北戯曲賞の最終候補になるなど高い評価を得る。2015年、KAKUTA「痕跡(あとあと)」が第18回鶴屋南北戯曲賞受賞。18年「荒れ野」が第6回ハヤカワ悲劇喜劇賞、第70回読売文学賞戯曲・シナリオ部門を受賞。2019年桑原の原作「ひとよ」が白石和彌監督で映画化された。



## ここ豊橋でしかやれないこと

桑原——『甘い丘』を上演するからには、私としては、「市民の人たちが頑張ってやったね」ということで終わりたい。誰が市民で、誰が劇団員かわからないぐらい、あるいは、全員が舞台である丘の上の工場に住んでいる人たちに会いたいという、非常にストイックにもつくりをした野望がある。

一方で、本来持っているその人たちの良さをどれだけ一緒にお互いが引き出し合えるかも目標としています。そういうストイックなものを作るからには、ある意味実力を持っている、あるいは、伸びてくぞとと思う人たちがオーディションで見えました。ですが元々の脚本には出て来ない、なんとも味わい深い人たちもたくさん来てくれて、ムズムズし、この人たちが書き下ろしてきたらいいのという気持ちも湧いてしまった。

そんな中で、ここ豊橋でしかやれないことは何かといたら、結局ここに居る人でしかできないものをつくる事だと思いました。今ある役に合わないからとお別れするのがもったいなかった3人だけ、新しいキャラクターを書き下ろして作ろうということも思いつき、この工場

の中で生きている新メンバーが出来ました。これは今後どこかでやることになっても、決して出て来ない、豊橋にしか居ないキャラクターになると思う。そこはぜひ期待して見ていただきたいと思います。

矢作——やはり、人を見て、作品を作っていくという。

桑原——昨日のワークショップで「やはりいいメンツだな」と思いました。そこにかかる苦勞よりも楽しみのほうが大きいし、これがチームになった時のことを想像したらすごくワクワクしました。素晴らしいキャスト全員を見て、「あそこ心配だな」が本当になかった。実力的にはまだ経験数とかの違いはあるけれど、個性の立ち方とか、全員の空気の良さとか、人柄みたいなことから察するに、「良かった」と初日にして思っています。あとは私の頑張りだな。

矢作——3月の本番に向けて期待することはどんなことがありますか。

桑原——今回一番課題で、大変だろうし、私自身も考えてなくてはいけないと思うのは、時間の使い方。出演者の多くは仕事をした後に稽古に来ることが多く、ギュッと集中するというのが難しいし、大変だと思う。そんななかで、ご一緒するスタッフの方々は、私が今まで

風に乗って  
丘を滑り降りてくる  
女たちの笑い声と匂い  
それはどこか汚く甘く  
誘う薫りである

ずっと一緒にやってきた方々なので、私がどういうオリティのものを作りたいかをわかっていただいていると思います。ここまで行こう、と引き上げていくスタッフワークでバックアップをしてくださると思う。例えば、こちらが考えている工場という世界観、ディテールをすごく細かく美術家さんが作ってくださる。そういう細かいところから意識を高めていくことを今回はやりたいし、期待もあります。

あとは本当に、感染症対策ですね。全員が意識を高めないといけないから、ものすごく神経を使う。使った小道具は全部拭くとか、舞台袖に入ったら必ず消毒するとか。面倒くさいこと、キツイこと、ストレスが溜まることですが、徹底してきちんと向き合えていくと、この作品を守るぞという意識が高まる。そういう意味でも感染症対策も大事にしていきたいと思っています。

矢作——最後に、『甘い丘』の内容に触れつつ、豊橋のお客様にメッセージをいただけますか。

桑原——『甘い丘』は、丘の上のサンダル工場に集まる、訳ありの女性たちを主軸に置いたお話です。その中でも、主人公となる「かの子」という女性は、心の中で、どこにも行けない、その場から動けなくてどんどん足が土に埋まる感覚というか、どこかに逃げ出したいけどどこ

にも行けなくて、変わりたいけど変われなくて、前に進みたいけど進めない女性。多分すごく深い傷を持ってサンダル工場にやってくるんですけど、どう再生していいのか、どうやったら自分が歩き出せるのか、春夏秋冬の四季を通して描いている。まさにこの時期にやるべき作品かなと感じています。

今日本は、思った以上に心を病んだり苦しんだりしている人が多い。物理的に閉じ込められているし、経済的な圧迫もそうだし、閉塞感みたいなものがすごく増している。そういう中で、「私の再生は私から始まる」ということを、自然に物語の中で見ていただけたらと思いますし、そういう意味では、荒々しい女も、訳ありの女も、めんどくさい女も、そして馬鹿な男も乱暴な男も出てくる。

決してみんな、パッと見素敵じゃない人たちばかり出てくるのですが、そういう人たちの中から自分を見つけ出した時に、どこか抜け出す場所や前に進むきっかけになったり、勇気が湧いてくる、力強い作品だと思っています。ぜひ、ちょっと窮屈だなと思っている人や、モヤモヤする人に見て欲しい。そういう感じですね。

矢作——ありがとうございました。

## INTERVIEW:1





矢作——まずは、木ノ下裕一さんが多田淳之介さんに演出を依頼された理由をお聞かせください。

木ノ下——多田さんの作品はいつもヒリヒリさせてくれるんです。あのヒリヒリ感を木ノ下歌舞伎でもできたらいいなと思ってお声掛けさせていただきました。「ヒリヒリ」というのは、作品を通して現代社会を刺す、とでもいいたいでしょうか、常に現代に向けて問いを投げかける作品だということです。だから、観客である自分たちも問われる。観客席に返り血を浴びさせるのが多田演出作品の魅力ですよね。そもそも歌舞伎って江戸時代では現代演劇だったわけで、当時の観客はヒリヒリしていたはずなんです。その感覚を多田さんなら掘り起こしていただけるんじゃないかと思いました。

矢作——多田さんはどう思われて引き受けたのでしょうか。  
多田——これまでシェイクスピアなどの海外の古典は上演していましたが、日本の近代以前の古典は初めてだったのでとにかく楽しみでした。最初が2012年の『義経千本桜』全段通し上演で、白神ももこさん、杉原邦生さんと幕を分けて作ったんですが、4幕目は共同で演出してお祭りみたいで楽しかったし、なんだか日本の演劇に出会い直したような体験で、歌舞伎もあまり詳しくありませんでしたがこの公演をきっかけに面白さを知りました。

矢作——再演では、取り組み方や意識は何か変わりましたか。

多田——内容も演出も変わったところは多いです。例えば出演者も初演は男性1人と女性8人でしたが、再演では男性6人と女性3人になりました。同じ戯曲でも取り組み方が全然違いますし、足したり引いたり、上演時間も50分伸びています。

矢作——木ノ下歌舞伎の特徴は古典のある種の現代化ですが、今回の上演ではどのようなことをお考えですか。

木ノ下——2012年は準備期間が震災のすぐ後で、上演が次の年。だから震災後のさまざまな問題意識があの作品には込められていました。『渡海屋・大物浦』の

登場人物たちは「海の底に都がある」と信じて海に沈んでいくわけだし、この演目を持つ「追悼」というキーワードが浮き彫りになりました。16年の再演は戦後71年目で、前年の70年目には報道やマスメディアでも盛んに近現代史を見つめ直すことを促していました。同時に、日本の戦争責任とか加害国としての側面をうやむやにするような世論の動きも見られましたから、僕も多田さんもいろいろ思うところがあった。だから、この演目をある種の「戦後処理の物語」として読み解きました。今回は奇しくも改元が行われ新元号になって、かつ震災から10年目。この演目は「天皇制」についてもかなり踏み込んだ戯曲ですから、これまで掘り起こしてきたテーマを引き継ぎながらも、また新たな現代性を見つけ出せると思っています。

矢作——作品の作り方としては、歌舞伎のスタイルを1回トレースして、そこからつくっていったのでしょうか。

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT 芸術文化プロデューサー  
歌舞伎は現代につながっている。

監修・補綴  
木ノ下裕一

時間を超え歌舞伎はやはり面白い。多田淳之介 演出

多田——はい、再演からですが歌舞伎の型もたくさん取り入れるようになったので。

木ノ下——木ノ下歌舞伎では稽古の初期段階で、歌舞伎の動きや台詞の抑揚などを俳優が一度トレースする「完コピ稽古」をやるんですね。多田さんはそれを見ながら、ヘッドホンでいろんな音楽を流しながら、この場面にこの音楽はどうだろうか試されています。多田さんの演出作品は選曲も大きな魅力の一つですね。いわゆる歌謡曲とかみんなが知っている曲を引用してドラマでぶつけることで、それがドラマに合致したり、あえて外すことで異化効果を生じさせたり。そういう大事な時間でもありますから、完コピは今回もやるつもりです。

矢作——多田さんにとって芝居の中の音楽はどういう意味を持っているのでしょうか。

多田——そのシーンのためにオリジナルの曲を作るより、すでに世の中にある既成曲を曲の文脈ごと物語に

重ねていくことが多いですね。メロディーラインや歌詞も大事ですが、いつ誰が作曲して、どういう人生を歩んだ歌手が歌っているかも同じくらい大事で、例えば尾崎豊の曲って彼の人生が曲自体に乗り移っていて、その熱量と繊細さをロミオの人生に重ねてみたり、ジュリエットに10代の若いアイドルを重ねることで、400年前のイタリアの物語が現代の日本の若者の不自由さや純愛の尊さと接続できるんじゃないかと。

矢作——アーティストや曲の背景までを含んだ演出をされているというのは興味深いですね。

木ノ下——紙一重な神業で、多田さんはそこがすごく上手。音楽を、その作品や戯曲の批評として選曲しているという感じがいいんです。

矢作——『義経千本桜』の物語を簡単にお教えいただけますか。

木ノ下——源平合戦で平家が滅び、源氏が勝つわけなんです。そのとき平家の総大将・平知盛は海に沈んだことになっています。かたや、源氏の総大将が源義経。『義経千本桜』は、死んだはずの知盛は実は生きていたという設定でその後日談を描いている歴史のifものです。義経は兄の頼朝と仲が悪くなり、都落ちしている。義経が船に乗ろうとして、たまたま逗留した船問屋の主人が、実は知盛の世を忍ぶ姿。義経を海に連れ出して、そこで仇を討とうとするが、義経もこいつは知盛と気付いて、知盛の作戦は水の泡と化すという話です。歴史上では会わないはずの二人がもう1回会うんです。しかも知盛はもちろん敗軍の将。勝った側の義経も追放された、ある種、負けた人。負けた者同士が出会うことによって、誰を責めればいいのかという雰囲気になる劇です。

矢作——今回は2016年につくったものを更に変えていくのですか。  
多田——大きくは変わらない予定です。ただ世の中の方がだいふ変わってしまったので見え方の変わる部分が出てくると思うので、そこはアップデートしたいと思います。

3月13日[土]12:30開演/17:30開演  
3月14日[日]13:00開演  
作=竹田出雲、三好松洛、並木千柳  
監修・補綴=木ノ下裕一/演出=多田淳之介  
出演=佐藤誠、大川潤子、立蔵葉子/夏目慎也、武谷公雄、佐山和泉、山本雅幸/三島景太、大石将弘  
会場=PLATアートスペース

PLAT小劇場シリーズ

# 木ノ下歌舞伎 『義経千本桜 —渡海屋・大物浦—』

INTERVIEW:2



矢作——多田さんは、昨年からのこの状況をどうお考えですか。

多田——日本の歴史の中に疫病は付き物ですから、作品でも扱えたら面白いかなと思いますが、疫病自体に苦しんでいるということより、この疫病によって起きている摩擦や分断のほうが気になっています。不自由であったりとか不安定であったり、今までできたことができなくなるとか、演劇でできることといえば、そういう状況にある人々を丁寧に描きたいとは思っています。

矢作——木ノ下さんはこの状況を踏まえて、この時代をどう作品の中に取り込むか、何か考えたことはありますか。

木ノ下——誤解を恐れずに申し上げるなら、演劇というものが、医療や福祉や衣食などと比べて不要不急かと問われたら、やっぱり不要不急のものだと思っています。むしろ不要不急だからいいですね。心も身体も暮らしにいっぱいいっぱいになっている時には得られなかった感覚とか、一段深い思考とか、やすらぎを、一度立ち止まって、得ることができるのが演劇の強みですから。さきやかな「余裕」をお客さんにお届けするのが演劇の役割だと思うんです。「今は余裕なんて二の次だよ!」という方の意見もよくわかるんです。でも、同時にその余裕を必要としている人もいるはずだから、やっぱり劇場の扉は開いておきたい。そんな気持ちで上演します。感染防止対策を含め、上演の際には、いろいろと気を遣わないといけないところも増えたとし、作り手も、劇場さんも神経を遣う日々ですが、歴史を振り返れば、演劇ってとういうふうに、時代に合わせてカタチを変えてきたんですね。例えば、歌舞伎も、幕末のコレラ大流行の際は、やっぱり劇場を閉めたりしていた。当時の芝居小屋は飲み食いするし、客同士会話しながら観ていたし、狭いし、密だし、不衛生なんですね。明治に入ると、西洋人の来賓も呼べるような綺麗な環境の劇場が必要だということにもなって、現代の歌舞伎座につながるような西洋型歌舞伎劇場ができます。その都度、日本の演劇は、外的な変化に対応してきたわけで、今の私たちもそんな過渡期にいるんだなと思っています。

矢作——多田さんはこのコロナ禍の状況でどんなことをしていきたいと思われましたか。

多田——公演が中止になったり、リモートにしたりはいくつかりました。秋に開催している東京芸術祭でアジアの若手育成プログラムのディレクターをしているんですが、去年はオンラインでアジアの各地をつなげて開催したところ色んな発見がありました。もちろん舞台芸術は観客と同じ空間で上演するものですが、そこに至るリサーチやアーティスト同士の出会いはリモート環境によって格段に選択肢が増えました。東日本大震災以来、開演前のアナウンスで地震や避難経路について説明するようになったように、上演をどう成立させるかは今後も変わっていくと思います。以前の状態に戻るということではなく、このあと再びこの状況が来た時にどれだけ蓄積ができているかということが大切だと思います。これまでもうだったように、非常時こそ舞台芸術や芸術

は必要とされています。子どもも学校でマスクしたままだったり、普段と違う環境が続いて気づかないうちにストレスがたまっていきます。学校でのワークショップも感染症対策をしながらも実施できますし、実際に実施すると生徒にも先生にもとても喜ばれているようです。苦しい時こそ、遊びや楽しいことは必要ですから。劇場も上演の数は減っても閉めないでいてくれると嬉しいですね。

矢作——最後に、豊橋のお客さんに対してコメントを一言ずついただきたいと思います。

木ノ下——三度目の木ノ下歌舞伎ですが、毎回演出家が変わっているので、カラーの異なる作品をその都度お見せできるのがうれしいし、何と言っても今回は多田さんの演出です。当てられに来てください(笑)。歌舞伎演目のドラマの仕組みとか演劇としての発想の面白さももちろん味わっていただけます。それが意外と現代とつながり、人間って変わってないなと感じたり、もしくは、人が人と争う時、何か対立する時にどういう解決策があるのかを、日本人はずっと考えてきたのだと思ってもらえる作品になると思います。それは多分、対立した時に何とかしないとお互い生きていけないという、日本が

木ノ下裕一[きのした・ゆういち] / 木ノ下歌舞伎主宰。1985年和歌山市生まれ。2006年、京都造形芸術大学在学中に古典演目上演の補綴・監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。代表作に『勅進帳』『娘道成寺』『糸井版 摂州合邦辻』など。2016年に上演した『勅進帳』の成果に対して、平成28年度文化庁芸術祭新人賞を受賞。第38回(令和元年度)京都府文化賞奨励賞受賞。平成29年度京都市芸術文化特別奨励制度奨励者。渋谷・コブーン歌舞伎『切られの与三』(2018)の補綴を務めるなど、古典芸能に関する執筆、講座など多岐にわたって活動中。

多田淳之介[ただ・じゅんのすけ] / 1976年生まれ。演出家。東京デスロック主宰。古典から現代戯曲、小説、詩、ネット上のテキストなど様々な題材から現代を生きる人々の当事者性をフォーカスし、舞台と客席の境界を無くすなどアクチュアルな場づくりから作品を立ち上げる。全国の学校や文化施設でのワークショップ、創作、人材育成も数多く手掛け、韓国、東南アジアとの国際共同製作も多数。2014年韓国の第50回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。APAF(アジアパフォーミングアーツフォーラム)ディレクター、東京芸術祭プランニングチームメンバー。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。2010年~2019年富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。

## 現代を扶<sup>え</sup>る〈逆襲劇〉復活 今が昔に、昔が今に 終わりなき戦いのなか 甦<sup>ひとびし</sup>る幽霊の声



島国で狭い世界の中で色んな軋轢に対して対処しながらやってきた国だからなのだと思います。今色んな主義主張によって分断されている中で、この『渡海屋・大物浦』を観ていただくのは大変スリリングなことだと思いますので、ぜひお越しください。

多田——PLATで演劇を観ていれば大体の日本の面白い作品を観られます。東京や名古屋のような大都市ではないところで、そんな環境があるというのはやはり特別な場所だと思います。豊橋で上演するのは初なので、PLATのラインナップを見ている観客に観てもらえるのが楽しみです。歌舞伎の作品をこういう風に上演するのかというのを楽しんでもらったり、日本で何百年も上演され続けている物語のなかに自分を見つけてもらったり、自分たちの物語だと思ってもらえたら嬉しいです。常にその時代を映していくのが歌舞伎ですから、木ノ下歌舞伎は歌舞伎です。江戸時代の人にとっても『平家物語』という古典から生まれた『義経千本桜』の物語、歴史や古典を楽しむのにはうってつけの作品です。ぜひぜひ楽しみに来てください。

矢作——ありがとうございました。



塩見——「映像演劇」とは、演劇作家である岡田利規さんと、舞台映像作家である山田晋平さんが始められた演劇の新たな表現方法で、岡田さんは以前「(映像演劇)とは、映像のプロジェクションを用いた作品の展示を、演劇の上演として行う試みのことだ。」と説明されていました。これまで埼玉、熊本、札幌で上演されましたが、そもそもどのようにして始まったのでしょうか。

山田—— きっかけは写真家ヴォルフガング・ティルマンズの個展の感想をフェイスブックに僕が投稿したんです。この時のティルマンズの展示方法が面白くて、写真をもつごく大きく伸ばしたり、小さくしたり、高いところやすごく低いところに設置したりもする。あるいは、高級な印刷紙にプリントしたり、新聞紙みたいな紙にプリントして、ただ画びょうで壁に張っているだけとか。写真の見せ方の全部をデザインしているんですね。これを見て僕は映像にも同じことがいえると思いました。その映像が映る場所やサイズ、質感を最初に設定して、「これに何かが映るとしたら、どんな映像なのか」という順序で映像制作を考えてみたい、と投稿しました。その投稿をご覧になった岡田さんが面白いと思ってくださって。その後、映像作品を作られる際にそのことを思い出して、「その支持体、映像のスクリーンから考えていくことを一緒にやらないか」と声を掛けていただきました。

岡田—— 生身の俳優が舞台の上で演じる演劇とは異なり、映像演劇で上演されるのは、様々なスクリーンに投影された、等身大の役者の映像です。最初の埼玉では、美術展方式の映像という条件のなかで作ったものを映像演劇と名付けたのですが、それを実際にやってみたら、「なんか存在感があるな」とか、「映像だけど本当にいますね」とか、「映像だとすごく近寄って見たりできて、そういうのは生身ではできないし」と、考え方が広がり、今我々がいう映像演劇になっていきました。演劇は、フィクションが作れるんですよ。つまり、本当の現実では起こってないもの、「ここはそんな場所じゃない、そんな状況は存在しない」というものも起こせるのがフィクションです。本のフィクションは紙の上で起こり、演劇のフィクションは上演されている場所で起こる。通常の映像の場合、フィクションはスクリーンや画面の中で起こる。しかし映像演劇は、投影されている映像の中で起こるだけでなく、その場所で起こるんです。映像が映される場所があって、その映像によってフィクションが、その投影されるその場所で起こっている、それが映像演劇です。

塩見—— 映像演劇は、岡田さんが舞台上で上演される演劇を作るときと同じような作り方なのですか。

岡田—— 途中までは同じですが、違うのは、それを役者と一緒に見るということです。ビデオで撮って、それを



©宇壽山貴久子

岡田利規[おかだ・としき] / 1973年横浜生まれ、熊本在住。演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。『三月の5日間』で第49回岸田國土戯曲賞を受賞。小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』で第2回大江健三郎賞を受賞。16年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピレーのレパートリー作品演出を4シーズンにわたって務め、20年『The Vacuum Cleaner』が、ドイツの演劇祭 Theaterreffen の“注目すべき10作品”に選出。18年より『プラターナー: 憑依のポートレート』をバンコク、パリ、東京にて上演。同作で第27回読売演劇大賞 選考委員特別賞を受賞。



山田晋平[やまだ・しんぺい] / 愛知県豊橋市在住。演劇やコンテンツポラリゼーションを中心に、様々な舞台芸術の上演内で使用される演出映像の製作が専門。近年では、現代美術家とのコラボレーションによるプロジェクションマッピング作品や映像インスタレーションの製作も行っている。舞台芸術と現代美術のフィールドを横断しながら、映像芸術の新たな可能性を探る活動を展開。20年6月、豊橋市駅前エリアの水上ビル(大豊商店街)内に、アトリエ兼住居「冷や水」をオープン。地域に対する芸術普及活動も積極的に行っている。

映像で確認することではなく、実際の展示する環境に映して見るということ。例えばカーテンの向こう側にいる役を演じる作品では、まずカーテンに投影される演技をする。その撮った映像の素材を見るだけでは、意味がわからない。だから、実際にカーテンに映してみる。例えば、「ここでこういうふうに動いてほしい」とか、「この位置にいてほしい」と僕が言っている意味も、それを見るとわかる。それは、カーテンとの距離感や映っているその人の存在感が、「ただの映像が映っている」のではなく、そのカーテンの奥にいるような変なことが起こるといのはやはり、見ないと感じられない。このことは、いわゆる普通の演劇ではできないことです。

山田—— フィクションがその場所に成立するための条件というのが、実はものすごくシビアです。ほんのちよつとの音量の差とか、光の見え方とか、そういうことがものすごく映像演劇のフィクションの成立に影響します。仮のスクリーンに投影して、できるだけ本物に近い条件で稽古もやるのですが、最後にすべてを調整終わった後というのは、そのフィクションが、ちゃんと立ち現れ、見えやすい輪郭を持って現れてくる。これはとても感覚的な作業です。

あと、「目がだまされる」という言い方をするのですが、それはただの映像だとわかっている、プロジェクターもお客さんから見える位置にある。でも一瞬、映像でなく本物の人があるような錯覚が起こります。これを僕はイリュージョンだと思っているのですが、その条件付けもかなり繊細です。

岡田—— 同時にそんなやわじゃない。イリュージョンの成立のために、プロジェクターやスピーカーがガンガン見えていて、「これは映像や音声のデータが、今再生されているだけ」というのはわかっている、ここに人が存在するとどうしても思ってしまう。そこにガチッとロックしたときに、繊細かつ揺るぎない映像演劇が生まれる。これをわれわれは、「フィクションを甘やかさない」と言っています。

塩見—— 今回上演する『風景、世界、アクシデント、すべてこの部屋の外側の出来事』は、4つの作品から構成されますが、どんなコンセプトでしょうか。

岡田—— 世界が分断されている感じがすごく顕著になっていることを、今、かなりひしひしと感じながら生きることが多いわけです。自分はある状況のなかにいる。

だけど、その外側に全然違うものを見方をしている人や、社会がある。こちら側とあちら側に仕切られているのですが、その仕切りは石とか鉄とかそういう堅いものではなく、物質的にはとてもソフトだったり、もしくはそもそも存在しなかったりする。にもかかわらず、その分断がはっきりあるぶん、さらに深刻という感覚があります。

映像というのは何か映すものが必要なんで、今言った考え方を形にするのに、すごく合っていると思います。スクリーンという物質があると、それによって空間が仕切られます。例えば展示室というのは、ある壁で囲まれている。あなたがいる場所は壁に囲まれていて、その外側の世界というのがあるということ、その壁でふさがれた映像によって見ている人に意識させることができる。それって変でおもしろい、なんなら怖いことになり得て、形式的な都合として相性がいい。でもこのことは今、われわれがその問題に直面させられながら生きているよね、という事ありきなんですけど。

そういうコンセプトで共通している4作品です。そして今回は、出演者が二人だけ。つまり、登場人物が共通している。それによって、その4作品が一つのまとまりで、物語のような何かと感じてもらってもちろんよいです。

塩見—— 分断という言葉について、さらにお話しただけですか。

岡田—— 自分に何らかの、立場、境遇、考え方や価値観があつて、それとは異なる、ほとんど反対な人もいる。こゝまでは当たり前です。で、そういう、さまざまな考え方をする人たちのなかで僕たちみんな生きているんだよというのが、その通りだけど、きれいな事に聞こえます。実際は互いを存在しないようにして成立している現実を見ないでそういうことを言っている気がする。でも、どうしたらその問題が解決するのかは、僕にはわからない。ただ、大きな問題だということだけは思っているというなかで、分断ということをやったのです。

塩見—— 最後に、お客様に一言お願いします。

岡田—— 演劇を見たことがない人に、演劇を説明するのは難しいんです。映像演劇もおんなじで、見て頂いたら、「これは確かに演劇だ、でもいわゆる演劇ではない、映像演劇ってこれなのか」となっていたらと思います。

塩見—— ありがとうございます。豊橋の方だけでなく、沢山の方にご覧いただけたらと思います。

5月14日[金]—21日[金](17日は休館)  
作・演出＝岡田利規／映像＝山田晋平  
出演＝足立智充、椎橋綾那  
会場＝PLAT アートスペース  
チェルフィッチュの〈映像演劇〉

# 『風景、世界、アクシデント、すべてこの部屋の外側の出来事』

## 「演劇」として発生するフィクションと「映像」であることで発生するフィクションという二つの領域を同時に経験する。

作・演出 岡田利規 映像 山田晋平

聞き手 塩見直子 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 事業制作部

## INTERVIEW:3





### 託児サービス対象公演

要予約。生後6ヶ月以上。  
お一人様 ¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

### チケットの購入・お問合せ プラットチケットセンター

- 劇場窓口・電話 0532-39-3090 [休館日を除く10:00-19:00]
- オンライン <http://toyohashi-at.jp> [24時間受付・要事前登録]

### U25・高校生以下割引で案内

- ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
- 料金＝U25[25歳以下]:公演ごとに指定する席種の半額/高校生以下:1,000円
  - 購入方法＝各公演の一般発売初日から取扱い。
  - その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。

### チケット販売について

感染予防のため発売初日の窓口販売はなし。  
翌日以降残席がある場合は窓口販売あり。

新型コロナウイルス感染症予防対策として、開催日程・チケット発売日・公演内容等の変更がございます。最新情報はプラットチケットセンターまでお問合せいただくか、劇場ホームページからご確認ください。

二兎社『ザ・空気 ver.3 として彼は去った…』



撮影:本間伸彦

舞台手話通訳付きリーディング公演『凜然グッドバイ』



樋口ミュ

春風亭小朝 独演会



撮影:松本徳彦

大道芸 in とよはし



撮影:伊藤華織

チェルフィッチュの(映像演劇)

『風景、世界、アクシデント、すべてこの部屋の外側の出来事』



**2/20 [土]・21 [日]** 13:00開演 **好評発売中**  
二兎社『ザ・空気 ver.3 として彼は去った…』  
『ザ・空気』『ザ・空気 ver.2』に続く  
「メディアをめぐる空気」シリーズの第3弾をお届けします。 **2月20日のみ**  
●作・演出＝永井愛 ●出演＝佐藤B作、和田正人、韓英恵、金子大地、神野三鈴 ●会場＝PLAT主ホール ●料金＝[全席指定]S席6,000円、A席5,000円、B席3,500円ほか

**2/23 [火・祝]** 14:00開演 **申込受付中**  
舞台手話通訳付きリーディング公演  
『凜然グッドバイ』  
舞台手話通訳養成講座の受講生による舞台手話通訳付きのリーディング形式演劇作品を上演いたします。  
●作・演出＝樋口ミュ ●振付＝仲道泰貴 ●出演＝大木実奈、大鶴美仁音、鳥飼健太郎、ののあざみ、服部容子、平井光子、山田宗一郎  
●会場＝PLATアトスペース ●料金＝[全席自由]無料(要事前申込。当日座席に余裕がある場合はご入場いただけます。)

**3/6 [土]** 13:00開演 / **17:30開演** **好評発売中**  
**3/7 [日]** 13:00開演  
市民と創造する演劇『甘い丘』  
●作・演出＝桑原裕子 ●出演＝オーディションで選考された市民 ●会場＝PLATアトスペース ●料金＝[全席自由・整理番号付]一般2,000円ほか  
※当初予定していた開演時間・座席設定から一部変更となりました。  
[助成:(一財)地域創造]

**3/13 [土]** 12:30開演 / **17:30開演** **好評発売中**  
**3/14 [日]** 13:00開演  
PLAT小劇場シリーズ  
木ノ下歌舞伎『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』  
●作＝竹田出雲、三好松洛、並木千柳 ●監修・補綴＝木ノ下裕一 ●演出＝多田淳之介 ●出演＝佐藤誠、大川潤子、立蔵葉子 / 夏目慎也、武谷公雄、佐山和泉、山本雅也 / 三島景太、大石将弘 ●会場＝PLATアトスペース ●料金＝[全席自由・整理番号付]一般3,500円ほか  
※当初予定していた開演時間・座席設定から一部変更となりました。

**4/24 [土]** 13:30開演  
春風亭小朝 独演会  
人気実力ともに当代随一の春風亭小朝師匠。巧みで華のある話芸をたっぷりとお楽しみください。  
●会員先行＝2月20日(土) ●一般発売＝2月27日(土) ●会場＝PLAT主ホール ●料金＝[全席指定]一般3,800円ほか

**5/1 [土]** 14:00開演  
プラット2021年度プログラム説明会  
2021年度、PLATがお贈りする主催・共催プログラムをご紹介します。  
●会場＝PLATアトスペース ●料金＝無料(要整理券または劇場ホームページから要申込) ※整理券はプラットチケットセンターにて配布予定

**5/4 [火・祝]・5 [水・祝]**  
とよはしアートフェスティバル2021  
大道芸 in とよはし  
ゴールデンウィークは豊橋に世界で活躍する大道芸人が大集合!  
●会場＝PLAT ●料金＝無料

**5/14 [金]ー21 [金]**  
チェルフィッチュの(映像演劇)  
『風景、世界、アクシデント、すべてこの部屋の外側の出来事』  
●会員・一般同時＝4月3日(土) ●作・演出＝岡田利規 ●映像＝山田晋平 ●出演＝足立智充、椎橋綾那 ●会場＝PLATアトスペース ●料金＝[前売]一般800円、U25[25歳以下]400円、高校生以下無料 ※期間中一日限り有効(日時指定券ではありません)  
※開催期間のうち5/17(月)は休館日



二兎社  
『ザ・空気 ver.3 として彼は去った…』

**6/18 [金]ー20 [日]**  
彩の国シェイクスピア・シリーズ第37弾  
『終わりよければすべてよし』  
彩の国シェイクスピア・シリーズ、ついに完結! 23年の時を駆け抜け、走破する瞬間をお見逃しなく!  
●会員先行＝3月13日(土) ●一般発売＝3月27日(土) ●作＝W.シェイクスピア ●翻訳＝松岡和子 ●演出＝吉田鋼太郎 ●出演＝藤原竜也、石原さとみ、吉田鋼太郎ほか ●会場＝PLAT主ホール ●料金＝[全席指定]S席10,000円、A席8,000円、B席6,000円ほか  
※発売初日は枚数制限有り。

**若手音楽家育成事業** **好評発売中**  
プラットワンコインコンサート  
「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。  
●会場＝PLATアトスペース  
●料金＝[全席自由・整理番号付]500円  
**3/22 [月]** 19:00開演  
『ピアノのヴィルトゥオーゾ～名曲に乗せて～』  
白井那奈(ピアノ)、高柳満理奈(ピアノ)  
**3/29 [月]** 14:00開演  
『ドイツの風に乗せて』  
Lis[リス]  
波多野千夏(ソプラノ)、寛悠里(ヴァイオリン)、植田結衣(ピアノ)

**ダンス・レジデンス2021**  
篠田千明 ダンスワークショップ  
『ある一定の時間を経て体に書かれている動きを取り出して他人に振りうつしてみる』  
**4/10 [土]・11 [日]** 13:00-15:00  
●会場＝PLAT創造活動室A ●参加費＝無料 ●対象＝どなたでも ●募集人数＝各日10名(応募多数の場合は選考) ●申込方法＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより

**ワークショップ・レクチャー**  
木ノ下歌舞伎『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』関連企画  
木ノ下裕一 トーク&レクチャー  
**3/9 [火]** 18:00-19:30  
3/13[土]・14[日]にPLATアトスペースで上演する木ノ下歌舞伎『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』について主宰の木ノ下裕一が解説します。  
●対象＝チケットの有無を問わず、どなたでも ●会場＝PLAT研修室(大) ●参加費＝無料 ●募集人数＝25名(先着順) ●申込＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより

佐藤こうじ 音響プランニング講座  
『俳優のこころの動きをとらえて創造する音響演出』  
**3/10 [水]** 18:00-21:00  
舞台音響家・佐藤こうじによる音響のプランニング講座です。  
●講師＝佐藤こうじ ●会場＝PLAT主ホール ●参加費＝一般1,000円、高校生以下500円 ●対象＝高校生以上。高校演劇、社会人劇団、アマチュアの俳優・スタッフの方 ●募集人数＝50名程度 ●申込方法＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより

ままごと LANDMARK プロジェクト  
**3/11 [木]** 18:30-20:00  
10年後の自分へむけたタイムカプセルをプラットに埋めます。オンラインでの配信を予定しています。  
●会場＝オンラインほか ●参加費＝無料

スペースノットブランク ワークショップ  
『身体の経験を交差する』  
**4/25 [日]** 13:00-16:00  
身体や想像力を使い、舞台芸術の空間の捉え方を学びます。  
●講師＝スペースノットブランク(小野彩加・中澤陽) ●会場＝PLAT創造活動室A ●参加費＝1,000円 ●対象＝高校生以上 ●募集人数＝20名(応募者多数の場合は選考) ●申込方法＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより



高校生と創る演劇

# 『Yに浮かぶ』

2020年11月7日[土]・8日[日]  
 出演=オーディションで選ばれた高校生  
 会場=PLAT アートスペース



「令和2年に、面白い生き物と出会って」

テキスト・演出 **藤原佳奈** (mizhen)

「子ども」という存在は、社会に作られたものだ。「子ども」と言われるから、「子どもらしく」振る舞うことを要請される。自分の十代を振り返って思うと、甘えたり、分からないフリをして誤魔化したり、都合よく「子ども」の立場を利用してきたことはあったが、「子ども扱い」されて気分が良いことは一度もなかった。こちらに斜め下に向かってくる矢印に、心地良いものはない。だから、高校生に対しては、できるだけ、一対一の個人として関わろう、と挑んだ数ヶ月だった。マスクで半分覆われた顔同士であったとしても。

「高校生と創る演劇」というこのタイトル。このタイトルが好きだった。高校生が創るでも、高校生に創ってもらうでもない、「と」創る。でも、実際どうやって、この「と」を目指せばいいか、最初のうちは分からなかった。こちらは彼らよりも長く演劇をやってきたわけで、そのやり方を伝えたり教えたりするだけだと、指導するもの／されるもの関係で終わってしまう。どこか、こちら側が彼らについて行くような関係性も持てないか。そう思っていた。

稽古が始まってしばらくして、ある教室のシーンをブラッシュアップするために、「授業が始まる五分前」のエチュードを試したことがある。すると、一瞬でそこに「令和2年の高校生」が立ち現れた。椅子の座り方、話す姿勢、喋るトーン、目くばせ。私たちがどう真似をしてもできない、今高校生時代を生きる生き物の姿がそこにあった。当たり前なのだが、彼らはまさしく「高校生のプロ」だったのだ。「高校生のプロ」と「演劇のプロ」で、「と」を結べばいいのだ、と、腑に落ちた瞬間だった。

そこから積極的に「高校生のプロ」に頼ることにした。シーン創りのヒントのため、劇中のキーワードになる言葉から、連想する言葉を思いつく限り書いてもらうというのを何度も試した。例えば、「雨」から皆が連想したのは……「なみだ」「めがねの敵」「流しとうめん」「人影」「儀式」「よけれない」「鏡」など。めちゃくちゃ面白い。一つの言葉から人によって広がる景色が違って、それぞれにしか出せない言葉ばかりだった。(この時書いてもらった紙は、今も大事に取ってある)

1分間で思いつくだけ言葉を紙に書いてもらった後、書いた言葉を自由に発表してもらい、ホワイトボードを言葉で埋めつくす、というのをやった。しかし、この時、積極的に言葉を出してくれる人は少数で、「自分のは面白くないかも」「なんか違うかも」と尻込みする人が多かった。そんな彼らの紙を覗いてみると、すでに言葉はびっしり書いてあるし、その人らしい言葉ばかりが並んでいる。一人一人の紙を覗いては、書いているものは全部面白いのだ、ということを伝えた。回を重ねていくと少しは発言しやすくなったが、これは、象徴的な出来事だと思った。

遊びのモードがノッている時にはアイデアを出したり、発言する姿は生き生きしているのに、「評価されるかも」「誰かと比較されるかも」「自分だけが間違ってるかも」というスイッチが入った瞬間に、蓋を閉じてしまう、という場面に多々出くわしたのだ。せつかく持っているモノを、サッと後ろに隠してしまう。とてももったいない。私は心底腹が立った。

皆それぞれに違う身体で生まれ、違う道を歩み、違う感受性があり、誰もすでに創造的で、遊びがノリさえすればそれが発揮されるのに、彼らは、社会から何度も「遊ぶモード」を殺されてきたんじゃないか。彼らを委縮させているこの社会、そして、この社会を内面化している自分自身に対して、これを書いている今でも腹が立っている。

じっくり高校生と関わると、全員面白い。当たり前だけど、生きているものは皆面白い。高校生に色々と偉そうなことを言ったが、私も、憶病で周りと比較しては「自分なんて生きている価値がないかもしれない」と思い悩みながら、いまだに生きやすい形を模索し続けている未熟な生き物だ。高校生に話したことは全て、自分に言い聞かせたい言葉だった。

今回、『豊橋という街』と、『高校生12名』に当て書きをして、彼らが「今ここに在る」その印のような作品として創ったのが『Yに浮かぶ』だった。演劇は、幕が開けて、幕が降りるまでの間だけ、誰かを演じる。今回であれば60分ずつ、たったの4回。その4回の役を、大切に、最後まで演じ切ったように、あの高校生達にはこれからも、自分の人生を思い切り演じ切って欲しい。

いつ終わると知れない「死の気配」が、霧のように包む今の時代に出会ったからこそ、今回高校生と出会って気づいたことは、自分の人生に大きな影響を与え続けると思う。この出会いを作り、大変な状況の中、徹底した感染対策で千穂楽まで完走させてくれた穂の国とよはし芸術劇場の制作チームに、心から感謝している。

撮影：伊藤華織

## SUPPORT

知識製造業  
**三遠機材株式会社**  
 http://www.san-en.co.jp

**YOSHINO ASSOCIATES**  
 吉野設計研究所  
 http://www.440a.co.jp

**魚伊** 株式会社 魚伊  
 電話 52-5256

**株式会社 竹尾建築設計事務所**  
 代表取締役 竹尾 誠  
 豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332  
 浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

グロリアンピアノ地域特約店  
**白羽楽器 株式会社**  
 電話 053-464-3015

**竹内産婦人科**  
 産婦人科 婦人科(不妊治療)  
 豊橋市新本町23 (豊橋市西産婦人科) 電話 52-5256

**ケンチク 701**  
 KURONO ARCHITECT STUDIO  
 y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など  
**豊橋・豊川障害年金相談センター**  
 初回相談無料 ☎0120-891-498  
 豊橋市花中町 160-9 障害年金専門社会保険労務士 竹下英司

**看板広告 アラキスタジオ**  
 豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら  
**精文館書店**  
 TEL.54-2345

ONOCOM なければつくる  
**株式会社オノコム**

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科  
**医療法人栄真会 伊藤医院**  
 豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間 **数きく宗**  
 豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。  
**豊橋調理製菓専門学校**  
 豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

**豊橋銀行協会** (順不同)  
 三菱UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行  
 三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行  
 十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

創業江戸 喫茶兼菓子専門店  
**若松園**  
 御菓子司

**西村能舞台**  
 豊橋市上伝馬町 代表=西村 隆二 Mail=nnbutai@gmail.com

**気まぐれコンサート**  
 事務局/0532-62-9259(小川小恵)

安心・安全な地下駐車場  
**パーク500** ソコの親子の看板が自印  
 プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科  
**医療法人 塩之谷整形外科**  
 理事長 塩之谷 昌 院長 塩之谷 香 副院長 市川義明  
 豊橋市植田町関取54 電話 0532-25-2115(代)

豊橋名産 **傘あくわ**

**井上皮フ科クリニック**  
 診療時間 月・火・木・金 10:00~13:00 16:00~19:00  
 土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝  
 電話 0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。  
**共和印刷株式会社**  
 豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科  
**医療法人 大岩整形外科・皮フ科**  
 院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆 書道用品専門店  
**高誠堂**  
 豊橋市兵衛町四拾四番地 電話52-5514

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得  
**株式会社 三光製作所**  
**三光精密工業株式会社**  
 豊橋市佐藤一丁目12番地の3

生活にファインクオリティ  
**sala**

調理と製菓のおいしい資格。  
**豊橋調理製菓専門学校**  
 豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

広告募集

## TICKET CENTER

### チケットの購入・お問合せ

**プラットチケットセンター**  
 電話・窓口 **0532-39-3090** [休館日を除く 10:00-19:00]  
 オンライン **http://toyohashi-at.jp** [24時間受付・要事前登録]

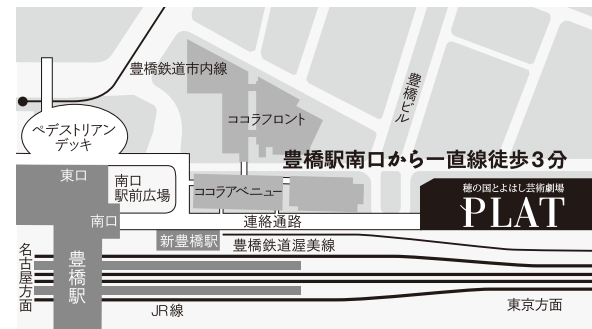


### プラットフレンズ募集 入会金・年会費無料

- 特典
- 1 公演情報をメールでご案内します。
  - 2 インターネットでチケット予約ができます。
  - 3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
- ※劇場窓口またはホームページから登録いただけます。

### U25・高校生以下割引ご案内

- ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
- 料金
- U25[25歳以下]:公演ごとに指定する席種の半額  
 高校生以下:1,000円
- 購入方法
- 各公演の一般発売初日から取扱い。
- その他
- 本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。  
 座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。  
 一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。



〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地  
 電話=0532-39-8810[代表]  
 開館=9:00-22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。  
 第三月曜が祝日の場合はその翌平日。  
 豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、  
 新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。  
 ※駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。  
 お近くの公共駐車場等をご利用ください。

## 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT